

令和元年6月24日現在

機関番号：34101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370777

研究課題名(和文) 続日本紀を中心とした八世紀紀年史料の総合的研究

研究課題名(英文) Study of historical materials of the 8th century, mainly Shoku Nihongi

研究代表者

遠藤 慶太 (Endo, Keita)

皇學館大学・文学部・教授

研究者番号：90410927

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：『続日本紀』を中心として八世紀の年代を記した史料を収集・検討し、歴史・文学・思想などの領域の研究者と意見を交換するなかで、史料の特質を掘り下げることが可能になった。本事業でめざした史料解題の作成についてはなお原稿作成の途上であるけれども、その成果の一部は『上代写経識語注釈』(2016年)、『日本書紀の誕生 編纂と受容の歴史』(2018年)として公表し、写経の銘文(識語)や『日本書紀』の研究状況をアップデートすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

長年にわたる『続日本紀史料』(皇學館大学史料編纂所)の編纂事業で蓄積された史料研究の成果・方法を史料集とは異なる視点から展開させ、ひろく人文科学の諸領域に接点を求めて成果発信を試みたことは、これまでの研究成果・研究方法そのものを次の世代に伝える役割を果たすこと意義あるものとする。本事業では「古写経」「律令」「編纂史書」「寺院縁起」などいちおうのジャンルを設定し、研究会を開催して国内外の研究者を招いたシンポジウムを開催した。またその成果を踏まえた出版にも積極的に取り組んだ。これらは個別に進められてきた研究に人的な交流をもたらし、より広い対象への成果発信を可能にした。

研究成果の概要(英文)：It became possible to delve into the characteristics of historical materials by collecting and examining historical materials that describe the eighth century, centering on 'Shoku Nihongi' and exchanging opinions with researchers in the fields of history, literature, and thought. We are still in the process of preparing a draft for the project, but some of the results were published as 'Commentaries on the Sutra of Ancient Manuscripts' (2016), 'The birth of Nihonshoki - the history of compilation and acceptance -' (2018), and we were able to update the research status of the inscription of sutra transcription (literacy) and 'Nihonshoki'.

研究分野：日本古代史

キーワード：続日本紀 古写経 六国史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

人文学では基礎研究にあたる史料研究が特定の機関・研究者に限られており、そこで蓄積されてきた知見を一般化し、より多くの分野に発信する必要があると考えていた。研究代表者の場合は、地方の一私立大学がその規模を顧みずに長年進めてきた『続日本紀史料』(昭和62～平成26年)の編纂が完結を迎えることもあって、これまでの編纂事業の中で収集された資料、蓄積された経験、養成された人材を活用し、八世紀の年紀をもつ史料の文献解題作成を企図したのである。それが完成品としての編年史料集の信頼を高めることにつながり、歴史書・法制書・寺院縁起・出土文字史料・文学書など、専門領域で分断されている広い意味での「文字史料」について、総合的な視野から再検討することを目指した。

2. 研究の目的

戦後の日本古代史では、奈良時代の基本文献である『続日本紀』の研究が進展し、信頼性の高いテキスト・注釈(新日本古典文学大系本『続日本紀』)に結実している。一方で木簡をはじめとする出土文字史料の増加は、編纂物である『続日本紀』の記述を問い直し、精粗さまざまな観点から奈良時代史を豊かに再構成する契機となってきた。

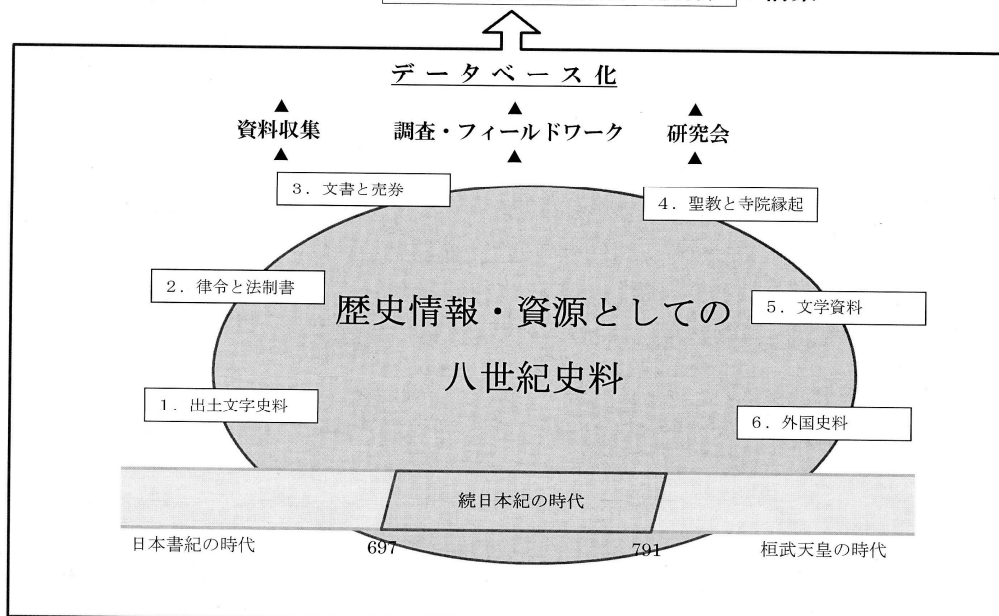
古代史の史料研究で比重が高かったのは一次史料(出土文字史料・金石文・文書)であり、編纂物に対する関心を上まわっていた。しかし信頼に足る一次史料は個別・断片であることが多く、歴史像を組み立てるには豊富な情報量と特定の意図に基づく整理が加わった二次史料たる編纂物を排除できない。とりわけ古代史の場合は、新たに発見された一次史料(木簡)と基本的な編纂物(続日本紀・日本書紀)の双方を往還することで議論が進展してきた。

そうであるならば、編纂物に固有の問題を解明することがバランスの取れた史料研究であり、さらには、史料の信頼性優劣を唯一の基準とした一次史料・二次史料といった分類を転換し、八世紀紀年史料を大観することによって、新しい古代史研究・史料学的研究を切り開くことができるだろう。そこで成り立ちの異なる二系統の史料を統合し、多様な歴史情報資源にアクセスするための研究基盤を形成することを目的として、八世紀紀年史料の総合解題の作成を目指す。

3. 研究の方法

歴史書・法制書・寺院縁起・出土文字史料・文学書などでユニットを構成し、研究代表者(遠藤慶太)・分担者(荊木美行・毛利正守)が分担して文献調査・学会発表などを進め、各ユニットごとでの研究会を開催した。

共通基盤となる八世紀史料文献解題(仮称)の構築



2014年度には「聖教と寺院縁起」(国立歴史民俗博物館)、2015年度には「国史編纂」(皇學館大学佐川記念神道博物館)、事業期間を延長した2018年度は「律令研究の現在」(皇學館大学佐川記念神道博物館)をテーマとしたシンポジウムや国際研究会を開催、国内外の研究者を招いて研究知見を深め、意見交換とともに交流を深めた。

以上の成果にもとづき文献解題の執筆を推進した。解題原稿は完成にはいたらなかったが、その原稿は皇學館大学研究開発推進センターに引き継ぎ、「日本後紀史料稿」などの編纂事業として作業を継続している。

4. 研究成果

『續日本紀史料』(皇學館大学研究開発推進センター史料編纂所編)で網文として採用した史料を選び、遠藤慶太・荊木美行で分担して解題原稿の執筆に取り組んだ。また『續日本紀史料』に掲載した奈良時代写経の識語すべてについて、「上代文献を読む会」と協力して注釈原稿を作成、研究成果公開促進費の交付を受け『上代写経識語注釈』(勉誠出版、平成28年3月)として刊行することができた。六国史については編纂史書の性質や内容、現代に伝えられた背景について平易に概説した一般書を執筆、遠藤慶太『六国史—日本書紀に始まる古代の「正史」』(中央公論新社、平成28年2月)として刊行している(発表論文・学会発表等は別項参照)。

これら出版による成果発信とは別に、本事業で開催した研究会、シンポジウムは文学・言語・思想など、日本史学とは異なる他領域で活躍する研究者の知見を直接知る貴重な機会となり、研究会をきっかけとして交流が広がったことは、研究代表者個人や研究拠点(皇學館大学)が今後の研究事業を進めるうえで大きな財産となった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

遠藤慶太「年号と祥瑞—九世紀以前の年号命名をめぐって—」、『日本歴史』846、査読有、2018年、1~14頁

遠藤慶太「五月一日経に写された隋経願文」、査読無、『史聚』50、2017年、50~59頁

遠藤慶太「難波津の歌の広がり—大伴家持の「桜花」詠をめぐって—」、『万葉集研究』36、査読有、2016年、171~197頁

遠藤慶太「『日本書紀 乾元本』解題」、『新天理図書館善本叢書第3巻 日本書紀 乾元本二』(八木書店)、査読無、2015年、3~11頁

遠藤慶太「古写経の印記「松宮内印」について」、『続日本紀研究会編『続日本紀と古代社会』(塙書房)、査読有、2014年、77~92頁

〔学会発表〕(計6件)

遠藤慶太「六国史からみた文字と声」唐代史研究会夏期シンポジウム(文部科学省共済組合箱根宿泊所)、2018年

遠藤慶太「垂仁紀と石上神宮—祭祀伝承とイニシキイリヒコ—」神社本庁総合研究所第63回神道行法錬成研修会(石上神宮)2017年

遠藤慶太「遷宮と六国史—饒金物・神宝の奉獻から—」国史学会(國學院大学)、2016年

遠藤慶太「『古事記』と帝紀」、『続日本紀を中心とした八世紀紀年史料の総合的研究シンポジウム「国史編纂」(皇學館大学)2015年

遠藤慶太「『大唐元陵儀注新釈』の批判報告」、『シンポジウム東アジア儀礼文化の実相と展開(東京大学史料編纂所大会議室)、2014年

遠藤慶太「古代文字史料としての写経識語」、『ブレインコリア 21+(韓国・成均館大学)2014年

〔図書〕(計4件)

遠藤慶太・河内春人・関根淳・細井浩志編、八木書店、『日本書紀の誕生 編纂と受容の歴史』、2018年、522頁

上代文献を読む会（稲城正己・遠藤慶太・影山尚之・桑原祐子・廣岡義隆）編、勉誠出版、『上代写経識語注釈』、2016年、684頁

遠藤慶太、中央公論新社、『六国史 日本書紀に始まる古代の「正史」』、2016年、248頁

遠藤慶太、塙書房、『日本書紀の形成と諸資料』、2015年、373頁

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：荊木 美行

ローマ字氏名：Ibaraki Yoshiyuki、

所属研究機関名：皇學館大学

部局名：研究開発推進センター

職名：教授

研究者番号（8桁）：60213203

(2)研究協力者

研究協力者氏名：毛利 正守

ローマ字氏名：Mouri Masamori

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。